

ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと風

第206号（2024年7月）夏号

ふるさと風、満十八年

この機関紙「ふるさと風」も満十八年を迎えた。「ふるさと」の歴史・文化の再発見と創造を考える」をテーマに各会員が毎回休まずに文章を書いている。また活動拠点も「まちかど情報センター」に移し、月2回の集まりで情報交換や勉強会などを行っている。少しでも興味のある方はいつでも気楽に参加してみてください。お待ちしております。

常世の風に吹かれて呟いて（12） 白井啓治

（故白井啓治氏の9年前（2015年）の記事から一部を抜粋して連載します。）

・風の呼ぶ声に目覚めればもう明日になる

昨夜は、睡眠数時間ほどであったものだから、夕食後ちよつと仮眠をしたら、一寸でなくなつてしまった。台風の残り風がガタガタ窓を叩くので目が覚めるともう明日になるところである。最近、夜の睡眠は6〜7時間確りとならないと身体が言う事を聞いてくれなくなった。11時になったというに、お猫様も布団を敷けと言いに来なかった。若しかしたら言いに来たのかもしれないが、小生気が付かなかつたのかもしれない。ハッと目覚めたら、椅子にお猫様が寝ていてこちらを見下ろしている。多分起しに来たのだろうな。お犬様は、机の下で大鼾をかいている。

台風の残り風が窓を叩かなかつたら、起きなかつただろう。

いや、お猫様にパンチをされていたかもしれない。目覚めてもまだ目が閉じてくるのを我慢して、呟いている。



（絵：兼平智恵子）

恵みの梅雨と草々のしげりにしげつたり

浅草寺では今日から鬼灯市が行われている。浅草千束に長く暮らした小生には「鬼灯市」の響きは懐かしく聞こえる。

今日と明日、観音様にお参りすると四万六千日に値するご利益があると言われ、婆さんに啓ちゃんも行つて来るんだよと毎年言われた。両親はキリスト教で、父は牧師でもあったので子供の頃から神社仏閣にお参りをするという習慣はなかったのであるが、東京へ出て来て婆さんと暮らすようになってからは、浅草寺境内で開かれるほおずき市、羽子板市、また鬼子母神の朝顔市、お酉様の熊手、植木市など随分といろいろ行かされたものだ。ケツサクだったのは、三社祭の時に「ヒロちゃん。

ふるさと風の会会員募集中！

当会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間達を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、1・4・7・10月初めに会報作りを兼ねた懇親会と各月末に雑談：勉強会を行っております。

会費は月額1,500円。（会報印刷等の諸経費）

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

木下明男 090-4715-5527 兼平智恵子 0299-26-7178

伊東弓子 0299-26-1659 木村 進 080-3381-0297

編集事務局 〒315-0018 石岡市若松 1-5-38（木村）

HP <http://www.furusato-kaze.com/>

神輿は担ぐもんじゃないからね。あれはぶら下がるもんだからね」と言つて送り出してくれることだった。ほおずき市のニュースを見て浅草時代を色々と思い出された一日であった。明日から太陽が出てくれるようだ。ただし真夏日がやつて来るのは嬉しくない。今日も伸びた草をむしつてやったが、蒸し暑く蚊がブンブン飛びまわっており、レモンバームを中心にハーブを摘んで手に揉んで顔や頭に刷り込んで蚊よけ対策を入念に行つた。お蔭で蚊に刺されることはなかった。余り長い時間は持たないが、ハーブの草汁を顔や腕に塗っておくと蚊が寄り付かなくなる。レモンなどの皮の汁を塗っても良い。鉢植えのハーブを手で揉んで草むしりの側に置いておいても結構効果がある。

旧千手院山門

兼平智恵子

毎年四月八日の花まつりで賑わう浄瑠璃山国分寺（常陸国分僧寺跡）の境内には石岡市指定有形文化財の旧千手院山門があります。



千手院は、弘仁九年（八一八）三月、行円上人（行基大僧正の法弟）によつて開基され、建長四年（一二五二）第十一世、心宥上人が没するまで続いたとつたえられている。[#]

その後の記録はないが、天正元年（一五七三）には、京都東寺の禅我大僧正の法弟、朝賀上人によつて中興開基されたと伝えられている。[#] 菩提山千手院来高寺と号し、朱印地十石、末寺二ヶ所、門徒二十一ヶ寺又門徒二ヶ寺があったと伝えられている。これら千手院の寺院はその大部分が府中（石岡）の町にあり、人々の信仰を集めていました。[#]

しかし、明治初年頃にはほとんどが廃寺となり、又、千手院来高寺も大正八年五月、浄瑠璃山東方院国分寺と合併して廃寺となり、現在ではこの山門が国分寺境内に残されている。[#] 残された現在の山門は、その当時のものと考

えられています。[#]

この山門の前に立ちますと上品な佇まいからは想像もつかない恐ろしい情景が目につき

ます。[#]



墓股（かえるまた）といわれる部分（杜寺建築で荷重を支えるための部材、下方が開いていてカエルの股のような形をしている）の彫刻です。

上図の通りです。皆様どう思われますか……この恐ろしい情景について「茨城の古社寺遍路」の著者、一色史彦氏は、[#]

「弱弱しい猿を、猛々しい鷲が襲うの図。裂けんばかりに開いた猿の赤い口からは、恐怖の絶叫が聞こえるかのようです。これをグイッと睨みつける鷲の目は、ランランと鋭く光り、美味しいうるさみにあふれた喜びに満ちているようです。アア、猿の運命やいかに」と書かれています。[#]

一色先生は東京大学大学院建築史研究室から東京都立大学建築学科に奉職。教育活動が続けながら、茨城県文化財保護審議会委員として重責を果たされました。

昭和六十三年の山門の修復工事での監理を依頼された一年程前に、恐ろしい情景の彫物が示している本来の意味を知ったのだそうです。

恐怖させるこの情景には、まったく逆の意味が隠されており、怖い鷲は慈悲深い観音様の化

身であり、弱弱しい猿は煩惱に身を焦がした人間の姿であり、欲に溺れ奈落の底に転げ落ちようとする猿を鷲に早変わりした観音様が救い上げるといふ救済の図なのだそうです。

「昭和四十八年から六十三年まで当時の日本は開発優先の潮流の真っ只中、文化遺産の保存にかかわる人間などは、異端視される社会的状況の中先生は、私利私欲をはなれ研究者の矜持を保ち、困難を押し切つてこの壮挙を成し遂げられました茨城県に県指定の文化財建造物が多いことはこの期間の先生の努力の賜物である」と共に活動なさった大工の田中様が寄せていました。[#]

そして、一色先生はこの著書（茨城の古社寺遍路）の中で石岡に熱いエールを投げかけています。[#]

「この石岡はかつて国府が置かれ、常陸の国の中心でありました。現在住んでいる足下の地中には、奈良時代の、青丹よしの大都市の栄華が埋もれているのです。実に心の浮き立つような話ではありませんか。これを町づくりに生かさないテは無いでしょう。しかも国分寺、国分尼寺が揃つて判明するところとしても有名です。[#]

かつての壮大なる伽藍を忍ぶ手掛かりが、建物の礎石と古瓦だけでは淋しすぎます。巨大な心礎を参考にし、復元した七重塔の図を作成して差し上げました。本堂内にありますのでこれもご覧下さい。是非とも七重塔を復元し、

ここで国分寺のサミットを開催し、石岡の健在振りを全国に示してもらいたいものです。今こそ好機到来。鷲と猿の図を見ながら考えたこと

であります」と……。#

この一色史彦先生の旧千手院山門の彫刻、「恐怖の図」から「救済の図」との紹介は、当会報（ふるさと風）二度目になります（二〇〇七年十五号）。この頃の市民の皆さんの石岡の歴史について関心がうすかったように感じていました。#

しかし、現在では歴史について日本中、勿論石岡市民の皆さんも大いに関心を寄せ、石岡市ふるさと歴史館を訪ねる方々が増加しつつ、歴史を大切にする風潮が広がってきている様に感じています。#

もう一度、一色先生の石岡への熱いエールを皆さんにお伝えしたご紹介しました。#

現在、石岡市では公共物の建物について全体的にどうするか検討中とのことでございます。#

参考資料 茨城の古社寺遍路（上）

一色史彦著 初版発行 平成六年

石岡市史 上巻 #

石岡の歴史と文化 #

○すずかぜ踊るもこもこ深緑に 智恵子 #

我が人生の回想17

木下明男

2000年代からギター館勤務へ・・・

松戸芳音（東葛芳音）勤務も数年で終え、2000年代の初めギター館勤務となる。私がギター館常勤に合わせ、それまで館長を10年続けてきた細川

氏は退任を表明。それに合わせて、それまでギター館を支えてきたボランティアの多くも辞めることになった。逆に細川氏と確執のあった、地元ギタリストの飯田明氏が館長就任を訴えてきた。残念ながら最悪の形でギター館運営が変革する羽目になってしまった。新しく出発するギター館は、飯田明氏の弟子や新しくボランティアに参加する人を中心として運営することが決まり、運営委員会が生まれた。

飯田館長の就任式を大々的に開催し、地元やギタ界から多くのお客さんを迎えた。最初のイベントとして、飯田館長の発案で「シニアギタコンクール」を開催することになった。それまでのギタコンクールは、殆どが若者中心で未来のギタリスト育成を目指したものであった。飯田館長は、それまで地道にクラシックギターを学んできた、中高齢者にスポットを当てたコンクールは無かった。「シニアギタコンクール」を発表すると、その反応は基きかった。審査員にはクラシックギター界、フラメンコギター界、中南米音楽の学者でもある、浜田滋郎、スペインギター協会の大沢一仁、小原聖子、鈴木巖、藤井敬吾、北口功、中村俊三、宮下幸子、角圭司など錚々たる先生方にお願いをした。

応募者は、全国・・・北海道から九州まで、アマチュアのギタリスト達多数がエントリーした。5月の連休だったが、一般の働く人たちが数日間泊りで参加できる日として設定。ゴールデンウィークで巷は行楽期分の中、ギター館には審査員・出場者・見学者を含めて1000名を遥かに超す人たちが集い大成だった。それにも関わらず、新館長は思い通りの運営が出来ないと1年間の

任務も果たさないまま辞意を表明。館長不在のまま新しいギター館運営は、新事務局員S君が就任し多くのボランティアと共に進めることになった。やがてそのS君も退職し、牧師の修行に転身してしまう。

コンクールで培った、クラシックギターへの思いはボランティアやギターファンに受け継がれ、月一のコンサート、アンサンブルやギター製作クラブ、フリーコンサート等に発展していったのです。今改めて思い起こすと、30年間の間に多くの人が集い、そして離れていった。そして、多くの方々が亡くなりでしたが、ギター館を創立した思いは受け継がれている。私も離れていった一人だが、別角度から（観光資源）ギター館を発信させていく立場になった。

地域に眠る埋もれた歴史（94）

木村 進

【まほらの里】（2）

ブログ（まほらにふく風に乗って）の（2011年1月のブログから）いくつか興味深いと思われるものを何回かに分けて抜粋して取り上げたいです。今回は天狗に続いて「驚（ワシ）」です。

驚の話

（1）驚と西の市

古事記や日本書紀などはじっくり読んでもないし、神話など子供向けに書かれた昔話を少し読んだことがある程度でした。また、書かれている内容もつじつまの合わないような作り話ではないかと誰もが感じ、まともに取り上げても面白くもなんともない話ばかりなのです。しかし、石岡

に来て神社や寺を回ってみているうちに、少し今までの私のイメージと違った世界があるように感じてきたのです。

何か昔から日本人の心の奥に残されている世界。もしかしたらそれは、大和王朝が都合の良いように私たちを洗脳した世界かもしれないませんが、どういう訳か各地に深く根をおろし、残り続けた世界なのです。

さて、今回は「鷲の話」です。鷲（わし）が神話に登場するのは。神話では、天岩戸に御隠れになった天照大神が、岩戸の前でアメノウズメ（天宇受売命・祖天鈿女命）（後に猿田彦と結婚したと思われる猿女君（サルメのキミ））が胸を露わにして踊りますが、その時、そこには八百万の神が集まっていました。そしてその中の一人の神が弦楽器を奏でます。するとそこに一羽の鷲が弦の先に止まります。

そのため、その奏でていた神の名を「天日鷲命（あめのひわしのみこと）」と名付けるのです。

これは何を意味しているのでしょうか？

問題なのは、この天日鷲命が阿波忌部の祖であることなのです。そして「鷲神社」など鷲を祀ったと思われる神社が千葉から東京や茨城の方に多く残されているのです。先日テレビで大化の改新の時に土地の名前を二文字にすることが決められたというように言っていました。

この時に現在の徳島は「粟」から「阿波」に変わり、大阪の「泉」も「和泉」となったとのことでした。そうすると「粟国」忌部氏が黒潮に乗り船で千葉房総に渡り、その地の名前が「安房（あわ）」となったことも領けます。

鷲や「粟」「麻（あさ）」阿波からもたらされた

もので総の国になった」などと関係する神社などを探していくと、きつと阿波忌部氏との関係がどこかでつながっているように思われます。

ところで「鷲」と書いて「わし」ではなく「とり」「おとり」と読む神社も多いことに気がつきました。とりはまた「酉」とも書きます。

東京などで昔から商売繁盛の熊手を売る「酉の市」がたくさんあります。有名なのが浅草ですが、

ここは正式には「大本山・長國山 鷲在寺（じゅせんじ）」といい「鷲大明神」を祀っています。

鷲大明神は「鷲妙見大菩薩」ともいい通称「おとりさま」と呼ばれています。

鷲を祀っているのは関西にはあまりなく、関東が多いと聞きましたが、ほとんどが事業・商売の繁盛祈願のところになっています。

これも恐らく阿波忌部氏の影響だと思っています。

知らず知らずに、日本の中に染みつき「商売繁盛」といって熊手を買って福をかき集めているのでしょうか。

もともと熊手は大分後からのものではようね。

なお、神武東征で熊野で戦った時に金鶏（きんし）＝金色の鶏（とび）が出てきます。

これは火の鳥（フェニックス、不死鳥）などの基になったようにも思いますが、おそらく太陽神を意味し、ヤタガラスとどこかでダブリます。

太陽の中心に黒いカラス（いつの間にか三本足になった）がいます。

その三本足のカラスの思想は中国にもあり、隣りの韓国（昔の高句麗の壁画にある）にもあります。いずれも太陽神と関係があるように考えられています。そうすると、大和民族は朝鮮を渡って日本にやってきた民族に違いありません。

蛇足ですが「鶏（トビ）」ですが、将棋（本将棋ではない）に「古鶏（こてつ）」と呼ばれる駒があり、これは成ると「天狗」になるといいます。

何故でしょうかね？

鷹（とび）が鷹（たか）を生むとも言いますので、裏に成れば「大鷹」などならわかるのですが…。

（2）千手院山門彫刻

石岡にある国分寺は昔の常陸国分寺の跡があるお寺ですが、昔の国分寺が続いてきた寺ではありません。昔の国分寺は七重の塔などがあり、かなりおおきな規模であったと思われますが、全国どこを見ても当時の寺が続いてきたところはほとんどないでしょう。

どこも、昔ここに国分寺があった場所として礎石などが残されているのです。

しかし、常陸国分寺は幸いなことに、七重の塔礎石も発見され、中門跡、講堂跡、金堂跡なども残されている数少ない貴重な場所であることは確かです。

その今ある国分寺の境内に「千手院山門」という藁葺屋根の山門が残されています。

この千手院は江戸時代はかなり大きなお寺（菩提山千手院来高寺）で、中町通りから香丸通りを通って、泉町へ曲がらずに真っ直ぐ行ったすぐ正面にありました。国分寺は逆にこの千手院の末寺のような位置関係にあったようです。

今はこの山門が残されているだけなのですが、ここに鷲の彫刻があります。鷲が子猿を鋭い爪で捕まえているように見えます。

こちらについてはこの前の兼平さんの記事を参照ください。それによると、鷲は慈悲深い観音様

の化身であり、猿は煩惱に身を焦がして奈落の底に転げ落ちようとしている人間を現しており、それを救済するために驚となつて助けているのだそうです。しかし、神話にでてくる驚を知るともう少し違つても見えてくるようにも思います。単に説明文をどこかで見ただけで、納得できない物は沢山あるように思います。

もちろん本来の意味などは私にはわかりません。少し考えてみたいという気持ちがあるだけです・・・。

なお、千手院の本寺は京都東寺です。従つて真言宗です。東寺観智院には宮本武蔵の「鷹の図」の壁画があります。

何故「鷹」なのか？ 今まででしたら、武蔵の剣豪としての勢いなどで絵を見てしまいがちですが、「五輪書」の武蔵の心境を想い、考えてみることもできそうに思います。

(3) 驚塚と鰻塚

石岡（府中）の平氏・大掾（だいじょう）氏が滅びる寸前（戦国時代末期）の話です。

府中城の東の守りを固めるために三村城が今の三村小学校（今春廃校となつた）のところの高台にありました。城主は府中城主大掾清幹の弟である「常春」が任じられました。

常春はまだ若かつたのですが、三村のまわりを固め、常春寺を建て、熱心にその地を守るのに尽力したように思います。「南城実録・三村記」などが残されており、当時を偲ぶことができるようです。

さて、この落城にまつわる話として「大驚」と「大鰻」の決闘の話が伝わって残っているのです。

小川城の園部は府中城の兄清幹の妻「鈴姫」の実家です。その園部が佐竹氏の味方となつて府中城に攻めてくる報が入ります。

そのため、三村城の本丸に重臣たちが集まり会議をしていた時に、近くの霞ヶ浦の岸で、「大鰻」とそれを空から「大驚」が襲つて、ものすごい戦いがはじまつたのです。戦いは、両方が傷つき、死んでしまつたといひます。

鰻は胴周りが1尺もあり、耳や歯がある大きなウナギだつたといひのです。

城の兵士は園部を攻めるために出陣しますが、そのスキをついて空になつた城を小田氏が1000名の兵をもつて攻めてきます。

城主「常春」は城の麓の田に馬の足を取られ自害して果てます。

この話に出てきた「大驚」「大鰻」を葬つた場所が「驚塚」「鰻塚」とよばれて残されてきたのです。

しかし、耕地整理の堤防増築の際にこの塚を削つたところ、中から2体の人骨がでてきて、古墳だつたということがわかつたのです。

この話には少しおまけがあり、驚と鰻が争つていたのを城の兵士である「飯田七郎左衛門」が撃ち殺したとあるのです。

なぜ、この造られたような話に人の名前が出てくるのでしょうか？

一般に作り話であればこのような具体的な名前は出てこないか、もつと有名な人の名前に置き換わつていくことが多いはずです。

この話を讀むとその時の光景が目に見えかぶようです。驚が神から使わされた鳥であるなら、この鰻は何を指しているのでしょうか。

鰻は淡水魚とは言われますが、深海を周遊して

戻つてくるとも言われています。昔から鰻は食用に食べられていたようです。

鰻を祀つたお宮や「鰻塚」などが各地にあります。これは、鰻を食べる病気が治つたなどと言い伝えが多くあり、ウナギを祀つたものと思われまふ。この話には判らないことがまだたくさん残されていふように思ひます。

(4) 驚神社

今日は驚神社（わしじんじや）（おおとりじんじや）の名前がつく神社を少し探してみまふ。

ここ石岡には探し方が悪いかもしれまふが、見つかりまふ。となりのかすみがうら市に1件、土浦市に3件の神社があります。すべて「わしじんじや」と讀むようです。

私が行つたことがあるのは土浦市大畑にある「驚神社」です。ここは県指定無形民俗文化財「からかさ万灯」といふ祭りがおこなわれること有名です。

これは、毎年8月15日に行われ、大きなから傘に火花を仕掛け、それを神社の鳥居から綱で結び、その綱にも火薬を仕込んで導火線のように火がから傘に伝わります。

から傘からは一斉に火花がひろがり傘の先から周囲に火花が滴り落ちまふ。昔は傘が回転したのですが、今は危険だといふので固定されているようです。お祭りの目的は「雨乞い」と言われています。

その他、つくば市代木の大驚（おおわし）神社、神栖市矢田部の大驚（おおとり）神社などたくさん神社がありいづれも天日驚命を祀つています。

さて、石岡にはまったくないかと言うと、実は染谷佐志能神社が天日鷲命（あめのひわしのみこと）を祀っているといえます（神社データベース）。石岡市史や現地の説明板ではなどでは、この神社は龍神山の龍神（雨の神）を祀るとしており、染谷にある佐志能神社は高龍（おかみ）神（雌龍）、村上佐志能神社は聞おかみ神（雄龍）を祀るといい、この天日鷲命が出てきません。

どうもこの天日鷲命が阿波忌部氏の関東進出に伴って広がったのと、日本武尊（ヤマトタケル）の進出がダブってくるようでもあります。

歴史など、何処までが本場で、何処までが嘘なのか？

これはきつと謎のままにしておいた方が良いでしょうね。

（5）鷲子山上神社

鷲の話の最後に石岡からは少し遠いのですが常陸大宮市美和町にある「鷲子山上神社」を紹介します。鷲子と書いて「とりのこ」と読みます。

茨城県と栃木県の県境にあるとても面白い神社です。県境にあるためにテレビなどでもときどき紹介されています。

ここへ行くとすぐに「ふくろう神社」の看板などが目に入ってきます。「フクロウ」は「不苦労」につながるという単純なものです、いろいろなところにフクロウの像が置かれ、階段の数も99段で往復して2*99（不苦労）だといっています。

また敷石に6角形の亀型を使い幸せに長寿で

きるようにと色々なものがあります。しかし、とても古い立派な神社で、辺りはいろいろな樹木の宝庫で神社境内の杉（御神木）も千

年杉と呼ばれています。また、この神社より手前ですが美和の交差点近くの「吉田神社」には本場に立派な「三浦杉」という大木が神社拝殿の石段の両脇に聳えており、とても見事です。



前の写真は鷲子山上神社の「楼門」です。時代を感じさせる立派な建物です。

しかし、本当に興味がわくのは「鷲子」（トリノコ）という名前です。祭神はもちろん「天日鷲命（あめのひわしのみこと）」です。阿波忌部氏の流れをくむ神社です。

そして、この地方が昔紙すきの地であり、水戸光圀が藩中の女性を連れ見学させたと伝えられる場所なのです。（話は水戸黄門の風車の弥七のモデルとなった人物がこの地の出身で、黄門に進言したとも言われています）

紙に白い「トリノコ和紙」というのがあり、各地に産地として伝わっています。辞書で引いても「鳥の卵の殻のように白いところから名前がついた」と書かれているようです。

しかし、この地名の「鷲子（トリノコ）」との繋

がりを捨てることができせん。

和紙は昔は大きな産業で、和紙が盛んであった明治の初め頃まで、栄えたといえます。

この神社も産業の神様としてズーツと守られてきたのでしょうか。

ちなみに、この和紙の製法技術は徳島（阿波）からもたらされたものと言われています。

風車の弥七が実在した人物なのか架空の人物なのかはあまり関係はないのですが、この地が和紙で栄えた土地であることは大変興味があります。地元には「弥七とその妻お新の墓」があります。

さて、鷲子のある美和地区は「星がきれいに見える町」ということで「星のふるさと」をキャッチフレーズにしています。

我が八郷地区などもきつときれいな星空がみえるはずです。ふるさつを見直したいですね。

“喜び”は

伊東弓子

喜びって辛いことの後に訪れるからなのか、喜びの後に来る淋しさによるものだろうか、日頃思っているが、知り合いのお婆さんから、若い頃聞いた話を思い出した。

娘が遠くへ行っちゃったんだよ。泣いた日もあったよ。家が不満だったんだろうか、いい男でも出来たのか。何か好きな仕事を始めたのかと、つい爺さんに愚痴こぼしを始めると、簡単に「どうせ嫁に行く身だ。そう考えればいい」と、言われてしまう。それもそうか、無事でいることを願って、体をこわさないようにしていこう、いつか会える日を楽しみにと、野良仕事に精出してたが、

知人には体裁のいい言い訳をしていた。

爺さんが亡くなって家の中は淋しくなった。弱音をはいてはいられない。今迄以上に元氣を出す毎日だった。そんな時、突然娘と旦那が三人の子を連れてやってきた。詳しい話は少しづつ語り合えるだろうと氣をつかつている自分に氣が付いたよ。とにかく毎日暮らしのことで精一杯だった。家の田畑を耕す程度ではと、手間どりもしたが現金収入がない中ではやりくりにも限度がある。そんな中でも年子の三人の孫は可愛さかり、不自由させないよう最低の努力は惜しまなかった。

少しでも収入を増やすため、娘は少し離れた町まで働きに出、旦那は空地を借りて開墾し食料つくりに励み、婆さんは三人の子を世話した。夜、夕食は楽しかった。皆が一日の出来事を語り合い、体を休める幸せは何にもかえ難いものだった。盆月に近くなると、野菜が次々にとれた。色とりどりの野菜が台所をうめつくさんばかりだったという。「特別肥しも使わなかったが、今までの木の葉・草が土が肥しになって育ててくれたんだらうか」と、話している傍で居眠りも始まるのも毎晩のことと寝顔が一段と可愛い。

二年目に入った頃は、すっかり一族としての形が自然になってきた。これが長く続けば、このまま、ここの家族になればいいかと、淡い夢をいだいたりしたよ。盆棚に並んだ野菜は去年よりも大きく色がよかった。さつまいも、きゅうり、豆、なす、トマト、かぼちゃ、爺さんも喜んでくれているだろう、と思うと幸せが増していった。爺さんが生きていれば喜んだらうと思う度、涙がでたよ。

三年めの夏も畑には芽が出て、すくすく育って

いた。その年の夏は何故か小寒い感じがして、どこか破れたすきま風が入ってくるようだった。

ある晩、娘家族の姿がなくなった。荷物は勿論、ごみ一つ残してなかったし、後追う気もなかった。淋しさはあったが悲しさも惨めさもなく、負け惜しみかも知れないが置き手紙があったのがせめてもの喜びだった。「上の子が学校へ入るので、嫁ぎ先へ戻ります。勝手な振る舞いでご免なさい」としるされていた。涙が出て止まらなかったという。子供の幸せは親の幸せだと改めて思い、爺さんに報告の線香をあげたという。その年、野菜は夏草も伸びてきた中に豊かに実っていたとのこと。盆棚に並べ、ご馳走をつくり、すがすがしい気分です飾ったという。毎日行つて一つ残らず採ってきて食卓に並べた。野菜の減っていく数と、草の茂っていく様子が競争のようだったとか。毎年その場所に行つて育つて実つていた物をとってきたそうだ。今は遠くになった畑を眺め、過ぎ去つていった日々を思う幸せがあるという。

今年は鹿島方面に行くので、その下調べなどしていた。去年の行方方面の写真の中の妹を見た。薄紅色の姿が蝶にも見えた。楽しい旅であった後、一ヶ月後位に姿が消えた。何処へ行つてしまったのかと思うと辛い毎日が始まった。

家へ行つてもいない。子供と遊んでいる姿もない。絵を描いている様子もない。辛さはやがて苦しさに変わつていった。精神的にも弱つて支障をきたす事が多くなったり、夏と秋の二季節を過ごして活動にも支障が出て行つた。

心身ともに疲れ切つていた晩秋、ある人が病院一階を車椅子で通り過ぎるのを見た人がいた。こ

の話を耳にして氣をよくした。車椅子に乗つており、一階に降りたというのは寝たきりではない、起きられるようになったという事で、前よりずっと良い状態になった事に間違いない。明るい希望が湧いてきた。きつとりハビリに行つていのだろうか。この喜びを隠しきれず親しい友に伝えていった。十二月になると家族が面会に行けるように声がかかったという。喜びはふくらんで、私もいつかは声がかかるだろうと期待する日々だった。十二月末、ついに面会の日、胸がどきどきしていた。待つていた事がついに現実となった。パジャマは相変わらず薄桃色で明るい表情に、今迄の悩みはどこかへ飛んでしまった。よかった。何を話したか覚えていない。一月末には、食べることを一生懸命やつていふとのこと。点滴をはずして入れ歯を入れた時は、口が二つあるかと思う程、合わずに苦労した事、おもゆ、離乳食と少しづつならしているとか。一つ一つ頑張っている様子を自信ありげに話してくれている。娘二人にはあれ、これと確りと注文していた。二月に会つた時、ものをはつきり言うのに驚いた。同室の人とコミュニケーションがよくとれて話をするのが楽しい毎日だという。一つ一つが自分のため頑張ろうねと、励ましあつていふ様子も自信にあふれていた。手紙が月末頃きた。小さい弱々しく見える字だが、確りと私を心配してくれていることも嬉しい。三月は家族中心だったので私は行かなかつたが、毎年妹がつくつて庭の畑にじゃがいもを植えている事、花を植えている家族の氣遣いも嬉しい思いで見えていた。四月には知人・友人のことを尋ねている様子に、どんどん周りの人への思いも強く感じたり、私から伝えることが多くなった。娘二人が

来るたびに部屋の片付けや（ベッドを入れるために）掃除をしているからと報告している。六月中半は誕生日ももうすぐ八十二歳になるよ、こんな長生きするとは思わなかったという。私も思う。が早いものだと思わなくてはならなかった。引つ張るように連れて遊び歩いた子供時代、「この人すてきね」と遠い存在の学生さんを噂した青春時代、子供をつれて行き往し語り合った母親時代、職場で共に沢山の子供の保育に携わった日々、妹からは日本画の生活を、私は御留川活動の助けをしてもらった日々、長いような短いような日々でもこれからはずっと続いて欲しいと願っている。撫子の花を届けて祝いをした。

これからの人生もいたらぬ姉ですが、よろしく願います。と添えて……。

人間同志のつながりから与えられる“喜び”は勿論大きいけれど、自然界のすべてのものから、私達は大きな“喜び”をもらっている。“御留川”活動のことで悩んでいた春先、先生のことを思いながら市海道（玉里の古道）を歩いていた。畑の奥から紅白の梅の香りが病んでいく心を癒してくれた。毎年、御留川の学習会にはこの枝をいただいて飾ったのだった。

五月の中頃だったか、いづみとの散歩中、急に方向を返（かえ）たので叱っていた。無理もない、そこには見るも恐ろしい虻がとぐろをまいていた。あの恐ろしさが今なお続いて、あの道はしばらく通らないことにした。

今年は早い中から鶯の声がした。それもとてもし長く、上手な響きが山の木々の間を渡ってくる。ほととぎすの声は、なかなか聞こえてこない。次

女の誕生日の頃やつと耳にした。短い声だった。散歩の度に白つめ草に目が行く。四つ葉は、四つ葉は……と目は移る。一度も見つからない。娘の誕生日の翌日見つけた一枝。ああよかった。

六月十三日（木）鹿島方面へ出かけた。北浦が見える広い広場、城跡だという一面に白つめ草、Kさん“四つ葉”を見つけ、続けて五つ葉も見つけたと叫んでいる。「幸せは若い人にやってくるのよ」と前を行く人が大声でいう。
“そうね”と頷いた私。
いよいよ夏がやってくる。



風と共に 《理》（35）

大輪啓展

季節毎にテーマを変えて、

今回のテーマは、「話す」

夏の兆しが訪れ、また暑いこの季節がやってきたなど、愛犬の散歩を早朝にする身ながら、苦手な季節の到来に少し肩を落とす毎日です。

皆さんは四季のどの季節がお気に入りですか？私は先ほど申し述べた通り、私は冬が好きです。乾いた風と身が引き締まる寒さが心地よく感じますので。

季節の話はさておき、今回は話すと言うごく

ごく当たり前の事について、話が好きな人、苦手な人、長い人、短い人、上手な人、苦手な人、様々に表す事が出来ますが、あなたはどんなタイプですか？

長く上手に話せる人はやがて、学校の先生だったり、会社のコンサルタントだったり、話す事を職業にしているかもしれません。

あるいは、苦手な人が短い言葉で伝えようとすれば、正しく想いが伝わらない事もままあります。

皆さんの生活しているこの世界には、後者の人達には優しい社会ではないでしょう、もちろん全てにおいて当てはまる訳ではありませんが、ごく一部なのではないでしょうか。

例えば話が上手いからと言って、良い事ばかりに使われる訳でもありません、例えば詐欺に使い人を信用させて傷つける様な人も中にはいるはずですよ。そんな使われ方は残念です。

話す事と聞く事、この2つは切っても切れない仲間ですね、聞く事が上手いからと言って話が上手いとは限りませんが、上手に話すためには、多様な情報を聞く事から始めると私は思っています。相手を深く知る事、それを上手に言葉に乗せる事ができれば、相手に感銘を与えたり、信頼を得る事につながって行くのです。

皆さんが日頃から話す事に意識を向けているかは分かりませんが、初対面や重要な商談、大勢の前で挨拶する時や、上司や年上の方話す時、どんな言葉を使用するかによって、印象は大きく変わるものです。

話を巧くしたい方は、物語を良く読んでください、どんな場面での様に表現する事が適切なのか、

また、その言葉一つでどれだけの効果出ているのか、聞く事をプラスするなら、その情景に合わせた音楽などを合わせる事も、ランクを上げる1つの役割を果たしてくれるでしょう。

相手が一人であれ複数であれ、必ず目を見て話す事を心掛けましょう。目は口程に物を言うという事がありますが、まさにその通りだからです。

こちらの話をちゃんと聞いているのか、飽きていないか、浸透しているのか、感動させているのか、つまらないと思わせていないか、様々な情報を目から仕入れる事ができるのです。

指導している時、重要な何かを正しく伝えなければならぬ時、自分の気持ちを伝えたい時、相手の目を見ながら、言葉を選びながら、表情を読み解きながら、慎重に事を進める事を続けて行くと、自然と話は上手くなって行きます。

その様な話し方を会得していて損する事はありません、喋り過ぎて失敗する事はありませんので、程度というのを同時に学ばなければなりませんけどね。

同じ話をされたとしても、相手との関係性や立場状況によってその伝わり方は様々です。

好意のある物同士が話をすれば、些細な事にでも感動したり感謝できる物ですか、仲違いの相手や初対面であれば、それが深く浸透するにはとても難しい事でしょう。

この様に、「話す」と言う、日常にありふれた物でさえ、突き詰めていけば多様に論じる事ができるので、普段何気なくしている事に、たまには深く思考してみるのも良いのではないでしょう

か？

決まった内容を複数人にある程度同様の理解を得られる程の話の達人にでもなれば、話す事から見える世界が他者とは違って見えているかもしれません。

そんな風に考えると、つまらないと思っている普通の風景はガラッと、形を変えるかもしれませんね。

そんな考えにふけている私も、どんなタイプの話し手なのか、これまでの回を読み返ししながら、是非とも皆さんお一人お一人で決定してみてください。

また、自分自身を振り返りどどの様な話上手なのか、あらためて考えてみるのも、悪くないですよ？

最後に、話す事、聞く事、単純ですが奥の深い日常の一つ、相手があつて初めて成立するものから、他者との繋がりや関係性について、良好に築けるならばその様な相手を複数持つ事をお勧めします。

話にも感情がありますから、それを忘れずに安易な言葉を選ばない様、この回を通じて是非今後の一助となれば幸いです。

それでは、また次回にお会いしましょう。

胎安神社と子安神社 小林幸枝

かすみがうら市にある胎安（たやす）神社と子安

神社の名前は看板を見て知ってましたが、40年間行った事無かったけど、今回立ち寄って見ました。胎安神社は優しく暖かい神社、歴史ある神秘的な神社でした。また子安神社も美しく、苔のある庭がとくに素敵な神社でした。

子安神社は胎安神社創建40数年後の大同年に建てられ、両社同じ様な記録や言い伝え、「しきたり」が残っています。

常陸国一之宮である鹿島神宮と、下総国一之宮である香取神宮は、利根川を挟んで鎮座しており、ほぼ同時期に創建され、元は一体であったとも伝えられている由緒ある神社であり、その香取神宮の御分霊である胎安神社と、鹿島神宮の御分霊である子安神社もきつと元は一体であり、同じ宮司が守っていたのではないかと考えられる絵図も残っています。両神社の間を通る道は、「鎌倉街道」とも呼ばれ、府中（石岡市）の国分寺（尼寺）方向に続いています。この道の両側に並ぶようにこの二つの神社は立っており、本殿が北向きの子安神社、南向きの胎安神社、どちらも社は、小さいけれども、他の村社との違いが見られます。

200m以上続く参道、同じ源氏の社紋である「笹竜胆」など、史実にはない歴史のロマンを感じます。鎌倉時代の前に、源義家親子が「奥州征討」（前九年の役）の際に、この場所の近くが宿营地域となり、両社だけでなく、近隣村社にも参拝、奏賽、寄進などをした社伝が残っています。

「子受け、安産の神」の胎安神社と「子どもの健やかな成長を護る神」の子安神社は、両社の由緒の通り、参拝者には、相並ぶ神として崇敬されています。

江戸時代後期には、御神徳によって「胎安神論」

「子安論」が盛んとなっており、多くの人が参拝に訪れていたようです。

胎安神社の参道の左右には、竹やぶがいつぱいであり、その竹の太さが、普通より超太い長い竹が伸びていてビックリしました。

御朱印を頂き、お守り(キテイ)が可愛かったので購入しました。とても嬉しかったです。

子安神社

・大同2年(807年)駿河国富士浅間大神と鹿島大神の御分霊を鎮齋

・天喜4年(1056年)源頼義・義家公父子奥州御討征の途上、再度にわたる御参拝で奥州鎮定と奥方の安産を祈願

・康平6年(1063年)御奥の大任と終え凱旋の折り、神護天祐のあらたかであったため、当社に報賽、社殿修営祭祠料の寄進をして源家累代尊襲すべきものと定めた。

・棟札に残る造営の記録として、拝殿造立が寛文13年(1673年)とあり、本殿はそれ以前江戸初期の建立と云われ、以来建て替えられていない。

・当社は、延長5年(927年)に編纂された「延喜式」の巻九十「延喜式神名帳」に記載された神社が全国に2861社、3132座あり、これを単に「式内社」または「式社」ともいいますが、茨城郡の中に書かれている式内社の「夷針神社」の論社といわれています。論社とは、現代において「式内社」の末裔社が判らなくなり、復数の末裔とみられる神社が在る場合、それぞれ神社を「論社」といいます。

水戸藩の天狗党について(2)

ヤマナカタダオ

前回につづき、天狗党について詳しく説明します。

明治維新(1868)まであと4年の歳月という幕末、国内では尊王攘夷と佐幕開国に意見が分かれ、大変騒々しい時代でした。

元治元年(1864)3月27日(旧暦)、常陸国水戸藩において、尊王攘夷を旗印とした、天狗党(急進派)を中心に約3000人の同志が筑波山に挙兵し、幕府軍など追討軍と戦い、対峙しました。

戦況不利の中、田丸稻之門を首領とする800余名が、追討軍の一角を突破して、脱出しました。

同年10月25日、彼らは、常陸国大子村に集結して陣容を立て直し、当時、藩内の諸生党(門閥派)のために家老職を追われた武田耕雲斎を総大将に1000人の軍勢が、尊王攘夷の志を天朝に訴えんと京都を目指すこととなりました。

彼らは、二月一日常陸国大子村を出立し、野州(栃木県)、上州(群馬県)、信州(長野県)、美濃(岐阜県)を通り、雪の越前(福井県)に入ってきました。

越前内では、西谷(大野市西谷地区)、池田(今立郡池田町)、宅良(南条郡南越前町今庄)の間道を進み、今庄宿から木の芽峠を越えて、新保(敦賀市新保)に至りましたが、加賀藩はじめ各藩に進路を阻まれ、やむなく京への志を断念し、降伏しました。

この降伏を受けた加賀藩の総帥永原甚七郎は、武士たちの国を思う心に深く感動し、一同を敦賀

の本妙寺、本勝寺、長遠寺の三個所に收容し、天下の志士、武士の鑑として手厚くもてなしたのである。

間もなく徳川慶喜は京都に引き揚げ、かわつて幕府から武士の処置の全権を取り付けて来た、幕府若年寄、田沼意尊が派遣されてきた。

この人物は、水戸で武田耕雲斎と対立し、激しい敵意を燃やしていたのである。

元治二年(1865)一月二十九日から武士たちを船町(現在の蓬萊町)のニシン倉一六棟を獄舎として押しこめ、拷問同様の扱いをした。

二月一日から、形ばかりの裁判で、一方的な即決裁判が行われ、わずか六日間で次のような判決を下した。

死罪353人、遠島137人、水戸藩渡し130人、追放187人、永厳寺預け11人、合計818人。

八百人を超える審理が終わった後、二月四日、十五日、十六日、十九日、二十三日の五日間に渡って353人の斬首を行った。

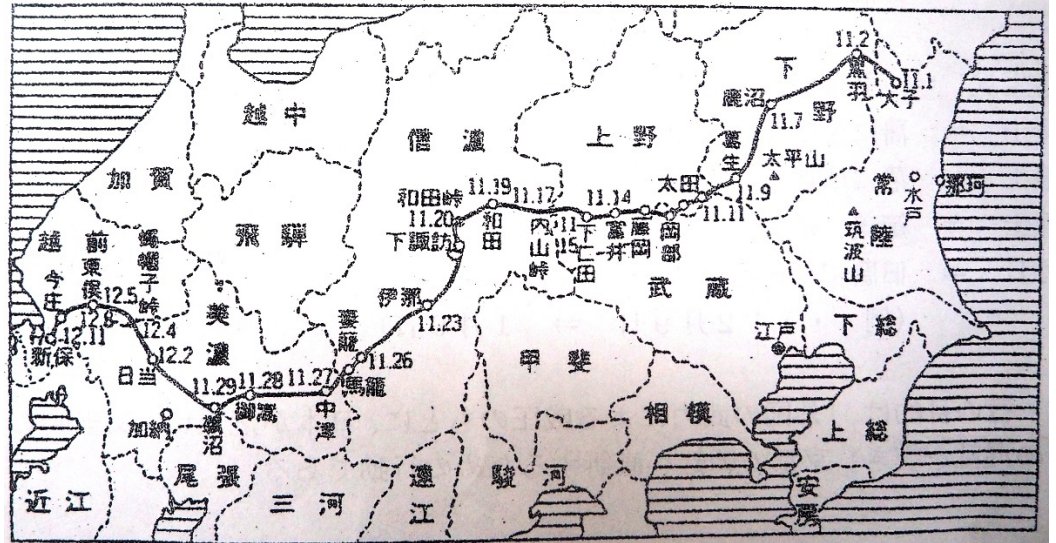
しかし武士たちの遺志は、回天の大業「明治維新」を実現する原動力となり、近代日本を誕生させた。いま武士たちは、周囲「約四・三メートル」四方、高さ「約四メートル」の塚に手厚く葬られ、限らない日本の発展を静かに見守っている。

なお、ここに葬られている武士は、武田耕雲斎以下411名である。

〈武田耕雲斎の辞世詠歌〉

『討つもはた 討たれるもはた 哀れなり』

同じ日本の 乱れとおもえば』



参考文献…

敦賀水戸烈士遺徳顕彰会

福井県敦賀市松島町

(事務局松原公民館内)

茨城県石岡市小目代(貝地)の五重塔

西方保男

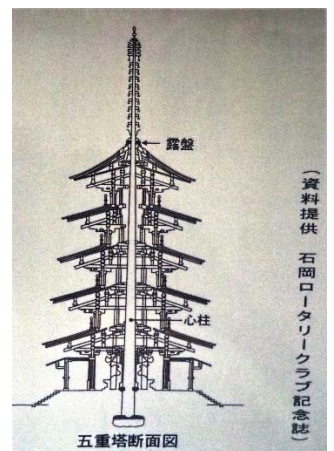
この地は、かつて、今は想像するも遙か遠い悠久の昔、八世紀前頃に創建された寺院跡地である。かつて、ここに、五重塔が建てられていたという。その跡に立つ案内板には、次のようにある。

五重塔の露盤について

石岡市小目代(現貝地二丁目)に所在する茨城廃寺は常陸国分寺より古い八世紀前期頃創建された古代寺院跡として知られていた。国の補助を受けて昭和五十四年より三年次計画で学術調査が行われた結果金堂講堂、五重塔の基壇が確認された・伽藍配置も法隆寺形式で寺の名も茨木寺であることが分かった。



この寺の五重塔の基壇は東西に12・2米、南北11・5米であった。釘など一切ない五重塔には塔の最頂部に露盤という心柱を通した石材の重さで重心をつけていた。



(資料提供 石岡ロータリークラブ記念誌)

当時どのような工法でこのような路盤が塔の頂きに据え付けられたのだろうかを想像する時古代へのロマンが蘇ってくる

資料提供 石岡ロータリークラブ



路盤
(レプリカ)

私は五重塔といえば、印象に残っている起こすのは、中学二年生の頃の記憶である。当時私の家は、東京は文京区の千駄木町にあった。その頃の記憶で五重塔についての父との思い出が浮かぶ。

私の中学校の通学途上には、かつて作家の森鴎外の邸宅が在り、その跡地が公園(鴎外公園)になっていた。鴎外は当時高台にあるその住まいを気に入って観潮楼と名付けていたという。その由来は、そこからは、当時、遙か“上野公園”の森や谷中方面の霊園が見渡せ、さらに往

時は、その先に東京湾が望めた故らしいという。私は、通学時、鵬外の胸像が立つ公園を通り抜けて通っていた。その中学の頃の五重塔にまつわる記憶が甦るのである。

その頃の新聞記事を追ってみよう。

谷中五重塔放火心中事件、1957年(昭和三十二年) 7月6日早朝に東京都台東区の谷中霊園内の五重塔が、心中事件による放火で焼失した。この五重塔は幸田露伴の小説のモデルにもなった天王寺の五重塔が1908年(明治41年)に当時の東京市に寄贈されたもの。火の手は、7月6日午前3時45分ごろに上がり、火の粉は塔から50メートル離れた地点にも降り注ぎ、心柱を残して全て焼け落ちた。焼失後、焼け跡の心柱附近から男女の区別も付かないほど焼損した焼死体2体が発見された。僅かに残された遺留品の捜査で、二人は都内の裁縫店に勤務していた48歳の男性と21歳の女性であることが判明した。遺体から金の指抜きが見つかり、当時そうした指抜きは洋裁師しか使っておらず、そこから身元がわかったという。現場には石油を詰めた一升ビンとマッチ、睡眠薬も残されており、捜査の結果、男女は不倫関係の清算を図るために焼身自殺を図ったことがわかった。

塔は再建されず、現在は礎石だけが残るのみである。(2007年に塔の再建計画が報道されている)当時の新聞より。

その日、学校から帰って来ると、父と一緒に焼け落ちた五重塔を見に行ったのである。五重塔は見る影もなく、真っ黒く焼け落ち、無惨な姿で崩れ落ちていた。その時の父の言葉が何故か今になっても耳に残っているのである。

“見えたやつぱりそうだな！その父の言葉が妙に耳に残っていた。

二人はそれぞれの思いを抱きながら家に帰った。途中、私は“なんで焼けたんだろね”と父にきいたが、父は何も答えなかった。帰ってから、父から聞いたのは、五重の塔の真中に焼け残った太い「心柱」のことであつた。五重塔は真中の心柱で持っていたことを、焼け跡に残った真っ黒い中心の太い柱の存在を自分の目で確認したかったのだ。「その言葉が、見えたやつぱりそうだな」塔の心柱のことだった。

建築屋の父にしてみれば、現代では五重塔の建築はまずない。そんな古代の古建築の構造様式を知る機会は生涯またとないだろうと思っていた。ところが、谷中の五重塔の焼失により、かねてからの思いが偶然に巡ってきたのであろう。

現代にあつて、塔といえば、東京のスカイツリーが思い浮かぶ。このスカイツリーには、最新の制振技術が採用されていると言われているのだ。塔の高さは、634メートルで、このスカイツリーには最新の制振技術が採用されていて、それは五重塔と同じ構造になっていると

いうのだ。その構造は、質量付加機構(しつりようふかきこう)という構造によって成り立っているという。

地震によつて揺れるものがあると、全体の揺れが打ち消しあい、小さくなる。五重塔の中心に立つ心柱は、他の骨組みと直接つながっていないのだ。したがつて、「これは構造の一部というよりは、制振技術ではないかと考えられたようである」。

東京スカイツリーでは、この最新の制振技術が採用されているらしい。それが「心柱(しんばしら)制振であるのだ。三重塔や五重塔」などの多重塔で使われている柱のことを指している。

日本では美しい五重塔が存在する。なかでも有名なのが、奈良の法隆寺の五重塔である。これが建てられたのは1300年前であり木造建築物としては世界で最も古い建物の一つである。

何百年ものあいだに何度も地震にあつてはいるのに、一度も倒れていない、とにかく驚愕に値することではないか。

「この五重塔の秘密は完全には解明されていないが、内部の「心柱」という「柱」が地面から上部まで貫かれているため、建物の強度をあげることが分かっている。」

東京スカイツリーでもこの「心柱」に似た構造が取り入れられることになったという。このように、東京スカイツリーは、最新の制振技術を実現した結果、五

重塔とそつくりの構造になった。

それは『質量付加機構(しつりようふかきこう)』という仕組である。地震で揺れるものがあると、全体の揺れが打ち消しあい、小さくなるというものである。

五重塔の心柱は、他の骨組みと直接つながっていない。だから「これは構造の一部というよりは、制振技術ではないか」と考えられたのである。

東京スカイツリーでも中心部に長い柱を入れていてタワー全体と直接繋がっていない独立したものになっている。そのため大きな地震がきても、真中の柱とタワーそのものの揺れにズレが生まれ、うち消しあうことができるのだという。



石 ちゃく きん (茨城廃寺の路盤とみられる)

日本は、昔から木造建築が盛んで世界最古の木造建築が日本にある。堅い石造りの建物ではないからこそ、地震が多い日本でも、長い間に倒れなかったのかもしれない。東京スカイツリーでは「心柱」以外にも「そり」「むくり」という古い建物技術が応用されている。

古い建築物の柱で、中心部が少し膨らんでいる「むくり」「日本刀」にも見られる「そり」を東京スカイツリーでも利用し

ている。コンピュータはおろか計算機もなかった1300年以上昔の建築技術が、2012年・平成24年に完成した634メートルという日本最大の建築物に応用されているとは、日本の先人たちの技術の高さに驚かされる。



茨城廃寺の礎石
(小目代公民館脇)

地名の「貝地」は昔は「廢地」とあり、辞書によると、「本来は官衙の舎屋の意味であったが、律令制下においては官衙の収蔵物・用度物のことを指すようになり、更に転じて官人(特に国司)の得分(給与)を指すようになった。」とあります。



「常陸国廢地」

【風の談話室】 《読者投稿》①

やわやわ暮らし (77)

さと女

サクラの便りが・・・此処の地では、まだまだの様です？入学式頃には満開かな？

可笑しなおかしな季節感です。世界規模での異常気象・・・どうなってしまうのか不安がいっぱい？

【4月】

・花の便りに誘われて友達の別荘に・・・サクラが咲き始め、満開のこぶしの花と遠くに筑波山が望める。お隣の梨畑には花が咲き始め、友達は週末の家庭菜園を楽しんでいた。

・遙か昔・・・50年くらい前かな？東京(太田・品川)で青春時代を共に楽しんだ6人の仲間たちが石岡にやって来た。ホテルグランマリアージュに2泊して石岡市内など探索です。今宵は大きな宴会場を、たった6人で貸しきり・・・昔話で盛り上がっています。

・盛り沢山すぎた石岡滞在2日目、まず市内にある常陸の国総社宮。夫が称宜を呼び出し、案内を受ける。その後笠間道の駅や陶器のギャラリー、笠間稲荷参拝。春風萬里荘散策、途中お蕎麦を食べ石岡に戻り、駒村清明堂の石割桜を見学、満開の桜に感動。ゆりの郷でゆったりと温泉に浸かり、ホテルに戻り再び貸し切り宴会、カラオケで歌声喫茶。部屋に戻り2次会。時を忘れ騒いでいる・・・何しろ九州、長野、小田原、福島、東京からと6年ぶりの再開、今度いつ会えるかわからないのですから。

・石岡滞在3日目・・・朝から知り合いの辻いちご園でイチゴ狩り。沢山食べて、お土産にも沢山買って頂き、イチゴやのSさんもおお張り切り。若い（若くはないが？）お客様と話す事が元気の元だよ・・・。その後フラワーパークでショッピングを楽しむ、軽い昼食（イチゴで満腹）を済ませる。その内雨模様になってきたので、駅に戻り解散。それぞれの場所に帰って・・・。

・散歩が楽しい季節になった。どこもかしこも花盛り。豊後荘病院の桜並木も真つ盛り。筑波山の方に目をやると柔らかな薄ピンク色の枝垂れ桜も見頃。いくつかのベンチも置かれ、散歩中の人が花見をしていた。途中藪の中に走りこんだ夫。その藪の中から現れた姿は、まるで熊の出現。両手には一杯の「タラの芽」が、今夜のご飯のおかずゲツトです。

・山々が何とも言えない程綺麗。そんなある日、山麓にある、築7〜80年の古民家「ブックカフェえんじゅ」を訪ね、頼まれていたエコクラフトの体験会をした。皆んな初めてなので、好きな色のクラフトで小さな道具入れを作ることになった。2時間では出来上がらず来週また集まることに・・・（月2回）興味ある方は「ブックカフェえんじゅ」の木崎さん方へご連絡下さい。心地よい古民家で、終わった後いただいたコーヒートとケーキ、何とも贅沢なほつとする時間を過ごさせて頂いた。

・夫が関わっている、常陸の国総社宮（石岡の祭り研修）飛騨高山研修旅行に同行した。目的の一つは春の高山祭見学。そして飛騨総社正式参拝。高山のまつりは2日目。日本3大美祭と言われていますがその豪華絢爛な祭屋台には目を見張った。

屋台は12台、うち3台はからくりの屋台、朝市で有名な安川沿いの桜並木のサクラは満開。古い建物の商店街も工芸品やら食べ物屋やらで、気を引かれるお店がずらりと並ぶ。何よりビックリしたのは、ものすごい人出なのに、ゴミひとつ落ちて無い事。ゴミ箱は置かず、ゴミはお店に返すと言っていた。長椅子もあちこちに置かれ、疲れたらちよつと休むことも出来た。2日目は飛騨総社で参拝を済ませ、屋台会館やら見学をして、遠路片道450キロのバス旅・・・道中はサクラ満開、北アルプスは雪景色の絶景だった。

・八郷柴内にある紫峰窯（知人宅）を訪ねると、2本の大きな桜の木（御衣黄桜）が満開、黄緑色の美しい花びら・・・これからだんだんピンク色になり赤くなるようです、1枝貰って来た。帰りに、近くの溜池で猫達がピョンピョン跳ねる魚に怯えていた、今日はすごいご馳走なのに？恐いなあ・・・？

・GWの始まり・・・3日間に渡り、関東最大級の音と飯のフェスティバルが始まった。夫は会議があり参加できないので、会場近くまで車に乗せて貰う。会場付近へは車の乗り入れ禁止・・・多くの人達が歩いている。会場内はいい匂いに包まれ、つつい、いろいろなものを買ってしまった。佐渡のカニ井、千葉からのマグロ井、沖縄のモズクのかき揚げ、イカ焼き、焼き鳥など、今日、明日はご馳走です。音のステージ付近もだんだん人でいっぱいになって来た。ほどよい時間で、そろそろ帰ろうと思っていると、会議の終わった夫が迎えに来てくれラッキー・・・。

・八郷の北柴内で備前焼の焼き物を作っている紫峰窯の母子。登り窯に火が入ったと連絡が・・・窯の中の温度が1100度超え、1200

度目指し赤松の薪をいれ続ける。窯は大きいので更に上の方の左右の窯口からも薪をいれ続け、上の方は700度でしたが次第に900度位になりました。そんなわけで後数日窯口から薪を投入し続けるようです。家族総出で近所のご夫婦などの手もあり、私も薪運び位は出来るので、夜中2時位までお邪魔しました。いい作品が焼き上がる事を願って帰って来ました。

【5月】

・おとなりさんの畑の一角で突然目に入った1メートル30センチもの赤黒いもの。カラーの花に似ている。新種発見か？急いでお隣さんに飛び込むと、それは、こんなにやく芋の花だよ、との事であつさり解決だった。わがやの畑の草が膝頭の辺りまで伸びてしまい、思いきって草刈り。ヘロヘロになって帰り、シャワーを浴びてからのご褒美。頂き物のメロンこれは旨い・・・。

・里山イチゴスムージー、12月から始まったイチゴも、もうすぐ終わりがかな!!。昨日午後は連休帰りのお客様でいっぱいでした。が、あいにく売り切れ。お客様は先日から始まったイチゴスムージーを手にと、緑の濃くなった山々や田植え真つ盛りの田んぼを眺めながら、里山を楽しんでいました。イチゴスムージーは土日限定のようです、大変おいしかったです。

・ある日の朝、誘われて茶摘みに・・・前日の雨に打たれ茶畑もつややかに生き生きと、摘み人も少々年々とはとても皆元気で集まりました。

・竹の師匠に刺激され、胡桃の皮に挑戦。地上に出て3年位の胡桃の木にあらはじめ目を付けてお

き、伐採。そして皮剥き。裏返して丸めてしばらく乾燥。夫の協力なしでは出来ません……。さうして？ 師匠から指導を仰いで、何を作ろうかな!! 考えるだけで愉しみだよ……。

・ウェブ上で賑わっていた迷い犬に会って来たよ……。何年も飼われているようで、すっかり落ち着いていた。蕎麦屋のマスターはまだ鳴き声を一度も聞いて無いとか？ 今度一緒に散歩しようねと約束してきた。

【6月】

・4年ほど前柿岡の住宅地、フラワーヒルにオープンしたカフェ「ぼうぎ」。予てから気になっていたので、今日はランチに……。オーナーさんは天文学の趣味があり時折星空カフェなど催しているとの事……。夫が星空について、いろいろ質問していると、ちようどお客様が帰られ、大きなスクリーンを降ろして、銀河を写し出し説明してくれた。何とも贅沢な昼下がり。ランチも自家焙煎のコーヒーも美味しく頂いた。

・今年は梅の大作。ちようど花の受粉の頃、寒の戻りで蜜蜂などが働けなかった、と巷の人が語っていた。あてにしていた近所の梅も全滅。いつもの年は歩けなくなるほど地面に落ちていたのに、そんな訳で今年は梅の仕込みはなし……。直売所で梅の代わりに見つけた「らっきよ」を買って来た。塩漬した後、甘酢漬けにします。



【風の談話室】 《読者投稿》②

こんな話を聞いた

池崎 晴

こんな話を聞いた

ある住宅地に幽霊が出ると云う。家の中に人影が……。子供達の間で語られた怪異。

その住宅地は、昔まだ日本国内が小さな国にわかれ戦（いくさ）をしていた戦国時代。石岡に城があつた時代。攻められた城の姫さんが沼に身を投げ死んだ時代。その沼は片目の魚が見られたと云う。姫の想いがその沼に残り、そして人影となり子供達の前に現れたのか。子供達は姫の話は知らないと云う。

又、こんな話を聞いた

ある人から聞いた。その人が子供時代にきのこ採りに行くと、きのこの傘の内側が真っ赤なものしか採れない場所があつたと云う。よくよく聞くと、その場所はかつて江戸幕府に反旗を掲げたものの敗れた者達が処刑された場所の近く。近くの川に血が流れ霞ヶ浦まで赤い川になったと云う。

又、又、こんな話を聞いた

国道近くの住宅地。不自然な程に真直ぐな道がある。そこに住む子供達の間で、夜兵隊の行進が有ると云う怪異。その真直ぐな道は日本軍の飛行場跡。兵隊は日本軍の亡霊なのか。子供達は、日本軍の飛行場跡地とは知らないと云う。

以前より親しくしていただいている人の大先輩が主催した鴨そばを食べる会に呼んでいただいた。その席の雑談の中で私が二十年以上前に聞いた話をした。その席では私が一番の若輩者。先達は皆、聞いたことがないと云う。会食主催の大先輩から文章に残せとのお話。鴨そば一飯の恩、無下にも出来まい。

私が二十数年前に聞いた話は三題。その三題の背景となる歴史の順に並べてみた。戦国時代、幕末期、太平洋戦争。皆、無意味に人命が軽んじられた時代。幽霊の寿命は戦国時代までと云われているから、もし姫の霊だとするとそろそろ寿命がつき消えて行くかもしれない。

八郷を含めた石岡は地質年代レベルの跡から、マンガの現代まで歴史年表が埋まる稀有な土地だと、石岡に住み三十年つくづく思うのだが、活かされていない（活かすつもりがない）とも感じている。

姫の、幕末の、太平洋戦争の史跡が残されて行き、語り繋げて行く、そんな八郷を含めた石岡であって欲しいと思う。



【風の談話室】 《読者投稿》③

常陸風土記紀行 鹿島地

幡谷 啓子

梅雨まぢか鹿島の森は神々の

息吹きあふるるばかりの緑

野に立たす石の童子のほてい腹

わが手はおのずその腹を撫づ

竹林の風情ある句碑三十数崎基

ばせをゆかりの大儀寺ぞここ

御手洗の水の清らかに雪が^{そよ}るる

蕎麦か風土記めぐり来て旨し

かみしめる古代米なる素朴さに

甦^{おおは}りくる大祖母の味

劳られつつ踏み入る神域の肅然と

杖の身おのず引きしまりくる

神域の涼しさを詠むばせをの碑

猛暑日の森に風あり鹿園の
今日のえにしにつつしみて寄り

鹿大方は昼寝しており

神に捧げし巫女の一と世は偲ぶのみ

礎石が示す狭き「跡宮」

水枯れのあやめ田そぞろ友は聞き

われは聞かざる牛蛙の声

風土記めぐりの一日は充ちて

明日^{あした}へとつなぐこころよ木村師に感謝

本短歌は、6月に訪れた鹿島地方の旅(勉強会)に参加された方から頂いた歌です。また同時に次のような感謝のお手紙もいただきました。

「過日は、風土記めぐりの貴重な機会をいただきまして楽しい一日を有難うございました。

皆様にも労われながら、おかげ様で、腰の負担はいつもの日々と変わらない状態で過ごすことができました。

今までにも、風土記に触れ、土地めぐりなど折々に体験しましたが、今回は、通りすぎてしまう遺跡、あまり知られていない場所を、案内していただき、若い時分とは違った触れ方味わい方が、自分ながらできたという実感があります。

年齢が与えてくれた余慶のひとつと思っております。自宅までも送って下さり、長い一日を大変お世話様になりました。有難うございました。

追..稚拙な短歌ですが、感動のさめやらぬうちにと、一気に詠んだものです。」

今回は風土記の勉強会として鹿島地方を訪れたものです。訪問計画のしおりを抜粋して以下に紹介しておきます。

常陸国風土記と鹿島地方を巡る

日程..2024年6月13日(木)

9..00 出発 石岡

- ・大儀寺(だいぎじ)..銚田市阿玉 615
- ・大光寺照明院(白鳥山)..銚田市中居 75
- ・沼尾神社..鹿嶋市沼尾 1298
- ・坂戸神社..鹿嶋市山之上 228
- ・鹿島神宮一の鳥居..鹿嶋市大船津 2251
- ・根本寺..鹿嶋市宮中 2682
- ・鎌足神社(歩き)
- ・跡宮..鹿嶋市神野(かの)4丁目1-12
- ・鹿島神宮 御洗池..鹿嶋市宮中 4349(昼食)
- ・鹿島城山公園..鹿嶋市城山1丁目1
- ・鹿島郡家跡遺跡(神野向遺跡)..宮中 137-7
- ・息栖神社..神栖市息栖 2882
- ・潮来あやめ園

その他、札村の普門寺(白鳥観音堂)、角折浜・文正長者屋敷(ハマナス公園)なども案にはありましたが、時間の都合で割愛しました。

《各見学場所解説と見所など》

一、 大儀寺・松尾芭蕉が貞享4年

(1687)に月見をかねて鹿島の根本寺の仏頂和尚をおとずれました。ただこの時仏頂和尚は根本寺を弟子に譲って退いており、この大儀寺に住していたと考えられ、ここが芭蕉たちが月見をした場所ともいう。



二、

大光寺照明院・常陸国風土記に白鳥が舞い降りて来て娘の姿になって池づくりをした話があります。池(灌漑用?)の土手を築きますが何度も崩れてしまい諦めて天に帰ってしまう話です。白鳥(しらとり)村という地名があった場所にある寺です。この説話の遺称地の一つです。

三、

香島の天の大神・沼尾神社、坂戸神社、鹿島神宮の三社の総称です。

・沼尾神社・鹿島郡の郡家が最初に置かれたところで大きな沼があった。経津主(ふつぬし)大神(香取神宮の祭神)を祀る
沼尾神社、坂戸神社ともに鹿島神宮の摂社で、神宮入口にこの2社の遥拝所がある。
・坂戸神社・鹿島神宮の祭司を担ってきた中臣(なかとみ)家の祭神である天兒屋根命(アメノコヤネノミコト)を祀る。中臣氏は奈良・京都の都では藤原氏となり(奈良)春日大社を建立し絶対的な権力を掌握した。最初に鹿島郡の郡家が置かれたのは沼尾神社付近という。それが常陸国風土記の書かれた奈良時代初期には神宮の南に移されていた。この写された場所が鹿島郡家跡遺跡(神野向遺跡)であり、これらはほぼ等間隔に並んでいる。本殿・拝殿も奥宮も同じ方向を向く。



四、

一の鳥居(大船津)・水中の大鳥居(鰐川・北浦) 対岸は潮来。鹿島神宮の昔からの船の港。東国三社巡りなども江戸からは船便でここに着いた?



五、

根本寺・聖徳太子が開基とも云われるほど古い寺で、芭蕉が月見に訪れた仏頂和尚がいた寺。また鎌倉時代から惣大行事職を継承した鹿島氏菩提寺でもある。鹿島神宮の惣大行事担ってきた鹿島家之墓がある。近くに中臣(藤原)鎌足を祀る鎌足神社もある。



六、

跡宮…ここは鹿島神宮の巫女（物忌…ものいみ）（少女から生涯独身女性）の住居があった。鹿島の神が最初に舞い降りた場所という。九州防衛に旅立った防人が最後にこの地から船で旅立った（鹿島立ち）の場所とも。



七、

鹿島城跡公園…島氏は府中の大塚氏、行方一族など同族で、常陸平氏の一族である。戦国時代末期秀吉の小田原攻め後に常陸国を任された佐竹氏により、天正19年（1591年）2月に南方三十三館と呼ばれた



多くの領主を常陸太田の城に呼び出され誅殺された。鹿島氏もこの中に含まれ、城内に残された城主の妻や家臣は城に籠って抗戦した。しかし、これもむなしく落城した。

八、

鹿島郡家跡（神野向遺跡）…沼尾の地から神宮の南に移された。位置は沼尾神社・坂戸神社・鹿島神宮・神野向遺跡がほぼ等間隔に一直線に並んでいる。郡衙跡としてはかなり規模も大きい。



九、

息栖神社…東国三社（鹿島神宮、香取神宮）の一つ。



忍潮井（おしおい…神宮皇后3年（94）、真水淡水が海水を押し分け湧き出たと伝えられる）息栖神社は大同2年（806）に右大臣藤原内麻の命により、日川地区よりこの現在の地に移されたとされ、三社（東国三社）が直角三角形となるように配置された。

十、潮来（前川）アヤメ園…天候、時間があれば。



水雲問答 (6) (木村 進)

【はじめに】

松浦静山 甲子夜話 巻39【1】より

これは江戸時代の（長崎）平戸藩の藩主であった松浦静山公が晩年の20年間に毎日書き残した随筆集「甲子夜話（かつしやわ）」の中に挿入されている2人（水・雲）の手紙による問答集を理解しようとする試みです。

(27) 節義の風衰へ

雲..

後世に至りて節義の風おとろへ、俗に申す鼻まがりても息さへ出ればと申す風情にて、概歎仕候。此の弊風いかがして矯正仕るべく候や、伺ひたく候。

(訳)

後世になって節義の風習がおとろえ、俗に「鼻が曲がつてもいきさえ出来ればよい」などというようなことわざがあったと思いますが、嘆かわしいことです。この節義の無い風習はどのようにに矯正したらよいでしょうか。お伺いいたします。

水..

節義の風衰へて、而して渙忍（てんでん）の俗興る。上の人以て誘ふ所有るに由る也り。

(訳)

節義の風が衰えますと、渙忍（てんでん）垢がついて汚れること）のようなよごれた風習が盛んになります。これは上に立つ人がそのような手本を見せているから下はそれに誘われて起るのです。

(コメント)

似たような話に「隗（かい）より始めよ」という言葉があります。上に立つ者ばかりではなく、自身も文句ばかり言っているもダメですね。まずは自分が手本となって改めないといけないのですよう。

道にゴミが散らかっていれば、そこにまたゴミを捨てるなどというようになりますね。

このようなことは上下の問題だけではないように思います。

人口減少で町も空洞化が起こり、空き家が増え草が生える。

このようなことはお上も下々も両方の協働が必要なのですが、行政側は権限を持っていますので法律も整備していく必要があると思います。

ここでは基本的には国、地域のために上に立つ者は、まずは私をなくしてしっかりと自分の立ち位置を確認して事を為してほしいと思います。

(28) 今昔・事をなす

雲..

今より見申せば、古人は出来そうもなきことまで為し得申し候。今人出来べきことも為し得申さず。如何のわけに候やと存候。

(訳)

今から見ますと、昔の人は出来そうにない事をまでよくやり遂げています。今の人は出来るであろうこともやり遂げられません。どうしてでしょうか。

水..

古人方（まさ）に行ふべからざるの事を行ひ、自ら謂（い）ふ、行ふべきの事と。今人は行ふべきの事を行て、先ず自らはれずと疑ふ。事の

行はれざる、職として是れの由。

(訳)

昔の人は出来そうもない事を行い、自分では当然のことをしたまでだという。今の人は行うことが出来る事も、自分からは出来ないと思っています。事が行われなければ出来ないのは当然です。これが職として（もつぱらの）理由です。

(29) 執政に権は必要

雲..

執政は、権なきはあしく候。固（も）と天下の鈞衡（きんこう）を掌（つかさど）り申任ゆえ、威権なくて叶はざることに候。

権と申て私を做（なし）申し候ことにては之れ無く候。

(訳)

執政において権力が無いのは悪です。これは天下の均衡をつかさどるのに必要なことです。相手を従わせる権力（威権）がなければ執政は叶いません。権とは申うせ、これには私心を申すことではありません。

(水)..

宰輔（さいほ）は権無かるべからず。権なくては国家を鎮圧するに足りず。若（も）し私心を以て権を立てば、即ち人、其の権を恐れず。矣（い）文章の終わりの語

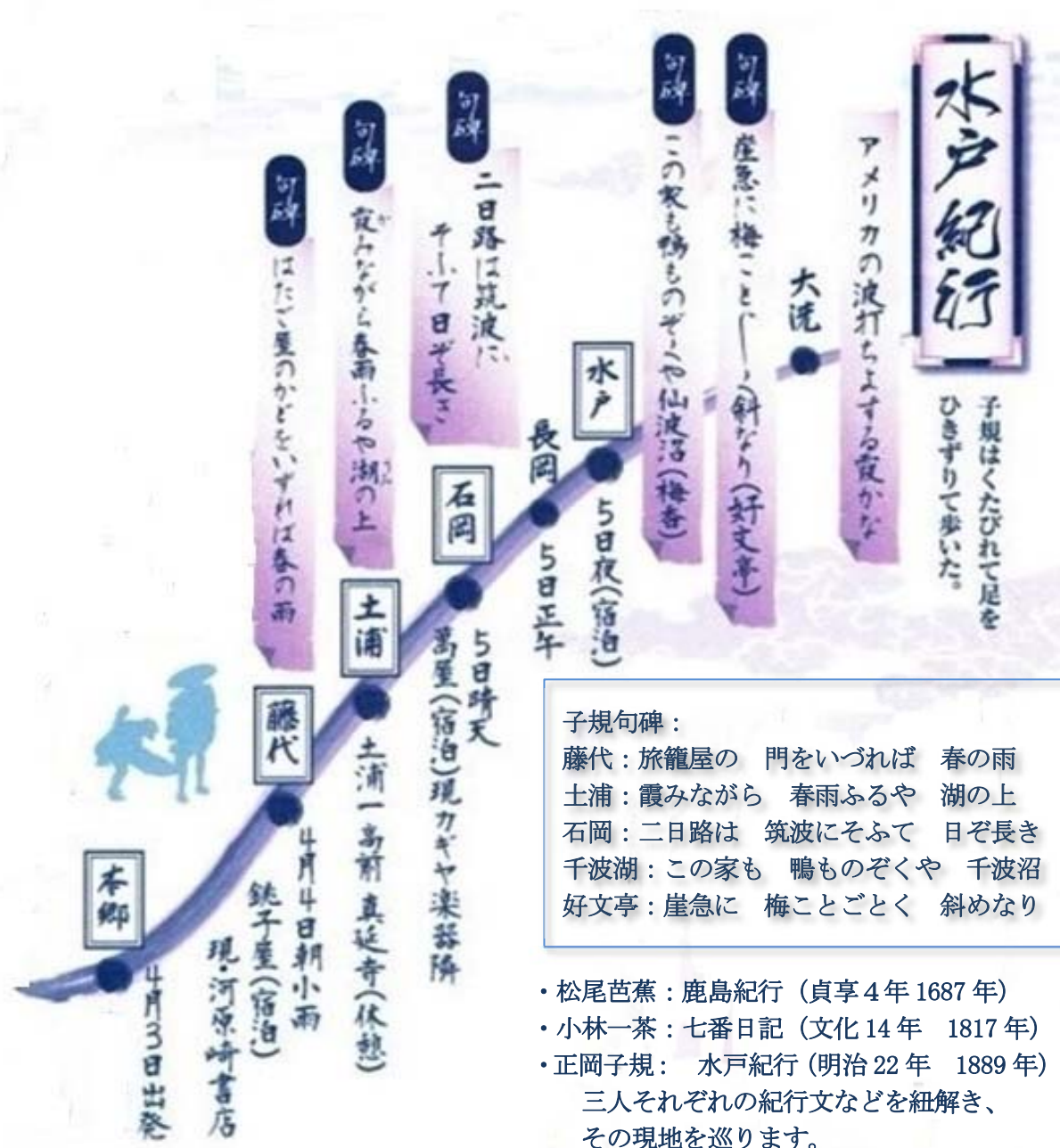
(訳)

宰輔（さいほ）政治を行う者）には権力が無くではありません。権がなければ国家を安定して保つことはできません。もし、私心がその権にあれば、すなわち人はその権に対して恐れなくなりま

(続く)

(NET でのご注文は ⇒ ふるさと風販売 Shop : <https://ishioka.buyshop.jp/> へ)

それぞれの常陸国紀行



定価 1 0 0 0 円 (税込 : 1100 円)